



日本生態学会 編
鎌田磨人・白川勝信・中越信和 責任編集

エコロジー講座 7
里山のこれまでとこれから 所収

はじめに

中越 信和



はじめに

広島大学大学院国際協力研究科教授 中越 信和

私が学生だった当時、生態学では、様々な植物群落・群集の構造を明らかにしながら、遷移の過程やその機構を見出してきていました。また、日本全土の植生図が作成され、国土の多くが二次植生で覆われているという事実が明らかにされてきていました。その二次植生が分布するところが、本書でとりあげる「里山」地域です。けれども、日本経済が発展し、開発が推し進められていたその時代、残存する自然植生の重要性和その保護の必要性が強調される一方、「里山の価値」や「里山景観が持つ意味」が語られることはほとんどありませんでした。進行する里山の変化に対して社会が無頓着であつたばかりでなく、研究者からも「人の利用」が介在する里山は、生態学的な原理を見出すのに不適切な場だと思われていたのです。

1990年頃から刊行され始めたレッドデータブック(RDB)は、そうした状況を二変させました。とても身近であつたはずの里山の多くの生物が、RDBに次々と掲載されたからです。この事実には衝撃を受けた人々は、里山の生物の消失が語っていることの意味を問い、里山から様々な恵みを得ていたことに気づきました。研究者は、里山景観の構造の変化が生物多様性の維持過程や生態系の機能にどのような影響を及ぼすのかを考え、検証を始めました。その成果は、『エコロジー講座3なぜ地球の生きものを守るのか』の中でも解説されています。

里山保全に関する国の政策も大きく変化しました。まず、1992年に締結された生物多様性条約に基づき、生物多様性国家戦略が打ち立てられました。国家戦略では里山の保全と再生を行っていくことが明示され、そのために協働していくことの必要性がうたわれました。そして、2010年に名古屋で開催された第10回生物多様性条約締約国会議では、日本で築かれてきた里山での暮らしのあり方は、人と自然の共存のあり方を世界に示し得るものだと「里山イニシアティブ」が提案され、採択されました。同年には、文化財保護法が改定され、文化的景観が文化財として指定されることにもなりました。原生植生で構成される自然景観だけでなく、里山など人の暮らしの中で創られ維持されてきた景観が、日本人が将来に引き継いでゆべき価値あるものとして認めら

れるようになったのです。

本書は、里山を保全・再生していくために必要な知識を、多くの方々と共有しておきたいとの思いから作成されました。「里山の今とこれから」では、里山景観がどのように維持されてきたのか、また、どのように変容してきたのかを整理しています。そして、里山を再生していくために各地で始まっている協働の取り組みについて紹介します。「里山の文化多様性を守るために」では、里山の資源を利用するために、それぞれの地域で醸成されてきた知恵や文化の多様性について解説します。里山を保全・再生するということは、地域の文化を将来につないでいくことでもあるのです。続いて、里山を再生していく上での目標設定のあり方について、生態学的な側面から解説します。「林の再生能力を活かす」では、里山の主要構成要素の一つである萌芽林ぼうがをとりあげ、森林の状態を診断しながら再生の方法を考えていくための基礎的な知識を提供します。「チョウたちと守る里山」では、里山に生息するチョウ類をとりあげ、それらを指標として植生管理のあり方を検討していくための道筋について解説します。「草の里山」と生きる」では、阿蘇の草原を守るために展開されている協働の取り組みについて詳しく見てみます。里山に関わる人も価値観も多様化している今、人と人との間、そして里山と社会との間で、新たな関係を築いていくことが必要です。阿蘇での事例は、新しい関係の築き方について大きな示唆を与えてくれることでしょう。

本書をおして、里山再生に向けた生態学的な道筋、里山を活用していくための知恵、人のつながりの重要性を理解していただければと思います。そして、一人でも多くの人が、一つでも多くの団体が、身近な里山の保全・再生に取り組んでいこうとする気持ちを持ってくださることを願っています。

なお本書は、日本生態学会主催の第17回公開講演会「里山のこれまでとこれから」(2014年3月16日開催)の講演内容をまとめたものです。作成に当たっては、平成25年度文部科学省科学研究費補助金(研究成果公開促進費)「研究成果公表発表(B) 課題番号2555005」の助成を受けました。厚く御礼申し上げます。

■ 里山を守る活動に参加したい・サポートしたい方へ

里山の環境を守る活動を行う団体や、関連の情報を発信しているウェブサイトを紹介します。活動拠点や内容、一般の方が参加できるイベントなどが紹介されています。直接活動に参加できなくても、商品を購入したり、寄付を行ったりすることで、活動をサポートすることができます。サイトで知ったことを他の人に伝えたりすることも、里山の保全に貢献することになります。

【総合的な情報を得たい】

- 環境省自然環境局自然環境計画課
＜生物多様性国家戦略＞
<http://www.biodic.go.jp/biodiversity/about/initiatives/>
＜里地里山の保全・活用、里山イニシアティブ＞
<http://www.env.go.jp/nature/satoyama/top.html>
＜生物多様性センター＞
<http://www.biodic.go.jp/>
＜生物多様性とは＞
<http://www.biodic.go.jp/biodiversity/>
＜生物多様性評価地図＞
<http://www.biodic.go.jp/biodiversity/activity/policy/map/list.html>
＜RDB図鑑＞
<http://www.sizenken.biodic.go.jp/rdb/index.html>
＜モニタリングサイト1000＞
<http://www.biodic.go.jp/moni1000.html>
- 文化庁
＜文化的景観＞
<http://www.bunka.go.jp/bunkazai/shoukai/keikan.html>
- にほんの里100選
<http://www.sato100.com/>
- モニタリングサイト1000里地調査
<http://www.nacsj.or.jp/project/moni1000/>
- 日本全国野焼きマップ（岐阜大学流域圏科学研究センター・津田研究室）
<http://www.green.gifu-u.ac.jp/~tsuda/hiiremap.html>
- 全国草原再生ネットワーク
<http://sogen-net.jp/>
<https://www.facebook.com/sogen.net>
- 景観生態学会
<http://jale-japan.org/wp/>

【『エコロジー講座7 里山のこれまでとこれから』で紹介した地域の活動について知りたい】

- 宝ヶ池プレイパーク（京都府）
<http://www.kyoto-ga.jp/kodomonorakuen/playpark/index.html>
- 里山ネットワーク世屋（京都府）
<http://www.satoyama-net-seya.org>
- プロジェクト保津川（京都府）
<http://hozugawa.org/program/ikada.html>
- 比良の里人（滋賀県）
<http://www9.plala.or.jp/satobito/>
- 財団法人大阪みどりのトラスト協会 ゼフィルスの森トラスト基金（大阪府）
<http://www.ogtrust.jp/donate/zephyrus.html>
- 雲月山の草原の火入れ（広島県）
<http://jale.sblo.jp/article/55536700.html>
<http://jale.sblo.jp/article/55738589.html>
- 芸北せどやま再生プロジェクト（広島県）
http://np0.shizenkan.info/?page_id=16
<https://www.facebook.com/geihoku.sedoyama>
- ひろしま緑づくりにんフォメーションセンター（広島県）
<http://www.h-gic.jp/>
- 阿蘇草原再生協議会（熊本県）
<http://www.aso-sougen.com/kyougikai/>
- 公益財団法人阿蘇グリーンストック（熊本県）
<http://www.asogreenstock.com/>



■ 執筆者紹介



なかごしのぶかず
中越 信和

広島大学大学院国際協力研究科
教授

エコロジー講座 7
さとやま ぶんさつばん
里山のこれまでとこれから 分冊版 6

はじめに

にほんせいいたいがかい
日本生態学会 編

かまだまひと しらかわかつのぶ なかごしのぶかず
鎌田磨人・白川勝信・中越信和 責任編集

なかごしのぶかず
中越 信和 著

2014 年 3 月 16 日 発行

発行 日本生態学会

製作 株式会社文一総合出版

2014 ©The Ecological Society of Japan

Printed in Japan

本書の一部または全部の無断転載を禁じます。

■ 日本生態学会とは？

日本生態学会は、1953年に創設されました。生態学を専門とする研究者や学生、さらに生態学に関心のある一般市民から構成される、会員数4000人余りを誇る、環境科学の分野では日本有数の学術団体です。

生態学は、たいへん広い分野をカバーしているので、会員の興味もさまざまです。生物の大発生や絶滅はなぜ起こるのか、多種多様な生物はどのようにして進化してきたのか、生態系の中で物質はどのように循環しているのか、希少生物の保全や外来種の管理を効果的に行うにはどのような方法があるのか、といった多様な問題に取り組んでいます。また、対象とする生物や生態系もさまざまで、植物、動物、微生物、森林、農地、湖沼、海洋などあらゆる分野に及んでいます。会員の多くが、自然や生きものが好きだ、地球上の生物多様性や環境を保全したい、という思いを共有しています。

毎年1回開催される年次大会は学会の最大のイベントで、2000人ほどが参加し、数多くのシンポジウムや集会、一般講演を聴くことができます。また、高校生を対象としたポスター発表会も行っており、次代を担う生態学者の育成に努めています。学術雑誌の出版も学会の重要な活動で、専門性の高い英文誌「Ecological Research」をはじめ、解説記事が豊富な和文誌「日本生態学会誌」、保全を専門に扱った和文誌「保全生態学研究」の3つが柱です。英文はちょっと苦手という方も、和文誌が2種類用意されているので、新しい知見を吸収できると思います。さらに、行政事業に対する要望書の提出や、一般向けの各種講演会、『生態学入門』などの書籍の発行など、社会に対してもさまざまな情報を発信しています。

日本生態学会には、いつでも誰でも入会できます。入会を希望される場合は、以下のサイトをご覧ください。「入会案内」のページに、会費、申込み方法などが掲載されています。

<http://www.esj.ne.jp/esj/>

